

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：32640

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370142

研究課題名(和文)江戸時代、日本に於ける中国明清画受容の問題

研究課題名(英文)The problem of the acceptance of Chinese Ming-Qing painting styles in Japan during the Edo period

研究代表者

近藤 秀實 (KONDO, Hidemi)

多摩美術大学・美術学部・教授

研究者番号：90225623

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、鎖国制度の江戸時代、長崎に齎された中国絵画がどのような形で日本文化に受容していったかを検証した。1654年に来日した隠元の携えて来た、曾鯨により興った肖像画派波臣派の一人張琦の描いた「費隱通容像」の影響下に成された日本の黄檗画像の検証。1731年、日本に渡った沈銓の帰国後の中国での弟子達の画業の調査。文人画家田能村竹田や頼山陽の追慕した中国人画家達の当時の中国での立ち位置の検証。これらの調査により、取分け、蕭雲從によって編まれた『太平山水詩画』中に描かれた図と、実風景との綿密な比較検証が行われた事は、江戸時代の文人画家達の絵画形成の謎を探る上でも貴重であった。

研究成果の概要(英文)：This project explored Chinese influences on painting in Edo Japan, during the sakoku era. First, I examined connections between the Bochen school of portrait painting and the obaku school. In 1654 the Chinese monk Ingen brought to Japan a portrait by Zhang Qi, a student of the Chinese portrait painter Zeng Jing; I visited places associated with Zeng Jing, and viewed paintings by Zeng and his students. Second, I examined connections to Shen Quan, a Chinese painter who visited Nagasaki and whose Japanese students developed the Nagasaki school of painting. I visited places associated with Shen Quan and his Chinese students. Third, I traced the influences of Chinese painting manuals on the Edo painters Tanomura Chikuden and Rai Sanyo, focusing on painters from the Xin'an (Anhui) school of painters, and the painting manual Taiping Shanshui Shihua, edited by Xiao Yuncong. These comparisons provide important clues to the development of bunjin (literary) painting in the Edo period.

研究分野：東洋美術史

キーワード：江戸鎖国期 沈銓 曾鯨 呉彬 太平山水詩画 黄檗画像

1. 研究開始当初の背景

(1)黄檗宗隠元禅師の来日(1654年)に伴い、輸入された肖像画及び絵画作品の位置付けする。曾鯨の弟子張琦の描いた『費隱通容像』は、長崎を中心として発達した「黄檗画像」の基となるものである。

曾鯨を中心とする新しい肖像画様式、波臣派の活動期とほぼ同時期に、日本に齎されたその様式は、日本がほぼ同一時期にその様式を共有し得た、極めて特異な例の一つとなる。ただ問題は、曾鯨の肖像画様式に西洋画の影響があるという莫然とした指摘が、現在でも通行していることである。曾鯨がイエズス会宣教師マテオ・リッチの携えて来た宗教画の影響を受けたものというのだが、この説の妥当性を検証する。

(2)隠元の中国で住持した萬福寺は、福建に位置する。隠元の齎した文物や技術、建築様式は、概ね福建を中心とした、いわば当時の地方文化の一つで、決して当時の首都北京地方のものではなかった。初期の日中貿易を司った商人達も福建出身者が多く、必然的に福建文化が輸入される事になる。

福建出身の画家達、王建章・大鵬・趙珣・陳曾則等の作品が、日本に齎された。それらは、文人達の間で、熱狂的にもてはやされ、絵画上でも影響を及ぼした。本土中国では、左程ではなかったのに対してである。この点に、日本の中国文化受容の特殊性があり、これらの画家とその作品の現地での調査を行ない、その絵画の性格を明確にする。

(3)日本に、1731年に来日し、1733年に帰国した中国人画家沈銓(南蘋)の研究。僅か二年間の滞日ではあったが、その絵画の影響には多大なものがあり、日本では「南蘋派」を形成し、或は「長崎派」の一部に加えられ、江戸時代絵画を考える上でも重要な案件となる。ただ、沈銓の絵画は、これまた熱狂的な支持を受け、お蔭で真贋合せて何百点以上あるとされる。日本で作られた贋物も多数あるが、沈銓帰国後も、日本での評判に応える為に、多数の作品を送り続けたという説がある。この説の妥当性を検証する為に、帰国後の中国での沈銓の弟子、沈天驥・童衡・吳琦等の関連資料と作品の調査を行なう必要が生ずる。沈銓故居の在る浙江徳清の周辺にも、現在、なお多数の作品が所蔵されている事から、吳興・徳清近辺での現地調査を行なう。

(4)嘗て唱えられた所の、浙江北西部で作られた日本の趣きのある絵画の存在という問題に対しての、その妥当性如何を、現地にて作品調査を行い検証する。筆者は、この問題、即ち來舶画家に関しては、かなりの数、日本人による偽作が紛れ込んでいるという認識を持つが、これに対し、その具体的検証を行う。上記の説明は、主に沈銓と同時期に來日されたという諸画家に関しての、漠然とした

印象によるものである。これら諸画家の日本に現存する作品を調査、比較検討し、共通するその様式を抽出する。

(5)沈銓の絵画には、日本的要素など微塵も見出せないのに、沈銓の弟子ともされる來舶画人の作品だけに、日本的要素が含まれるなどという説は、全く整合性を欠くものである。筆者は、沈銓帰国後の、中国での弟子とされる画家達、沈天驥・童衡・吳琦等の作品の調査を行う事により、沈銓様式を抽出し、日本で沈銓の弟子とされた画家の作品群との差異を検証する。

(6)南蘋様式を形成する基にあった所の師匠胡湄の作品を調査し、沈銓が胡湄の画風・技術の何を継承し、何を自らの物として発展させたかを検証する。併せて、胡湄の教えを受けた尤萃・李玥の作品調査を行ない、同様の視点でその特徴を検証する。

(7)日本に於ける南蘋派画家の作品調査。日本人が沈銓絵画を継承させた作品の中には、必ずや日本人的要素が見出せる筈である。沈銓の日本人の唯一の弟子熊斐、南蘋画風を江戸に伝えた宋紫石、伊藤若冲に南蘋画風を伝えたとされる鶴亭、その他、様々な場所で活躍した南蘋派画家の作品調査を行なう。

2. 研究の目的

本研究は、江戸時代、鎖国制度の下、日本に齎された中国明清画の実体を明らかにし、その日本画界に与えた影響を探るものである。主に、二点に焦点を絞る。

「黄檗画像」の祖である曾鯨と波臣派の肖像画の問題。

沈銓、及び中国での弟子達の作品の実体解明。

沈銓の師匠胡湄、及び沈銓の兄弟弟子、尤萃、李玥の作品調査。江戸時代の絵画制作に於いては、「画論」「画譜」「粉本」の果たした役割も多大なものがある。これらの研究も並行して行なう。

3. 研究の方法

従来の研究は、主に日本に存在する作品や文献資料に依って成されて来た。自ら、一種の限界を背負う事になる。本研究では、日本に齎された中国明清画関連画家の作品、及びそれを補足する関連文献資料を、主に中国に於いて調査する事を主眼とする。併せて、日本に存在する「画譜」「画論」「粉本」の調査を行ない、総体的に、中国明清画の影響の実体を明らかにする。

福建莆田出身で、南京で活躍した画家、曾鯨と吳彬を中心とする作品の調査。双方共に、江戸時代長崎で興った新しい画風の絵画を誘発した画家として重要な存在である。曾鯨の画風を基に派生した波臣派の一人、曾鯨の

直接の弟子でもあった張琦の作品「費隱通容像」は、黄檗宗隠元の来日と共に日本に齎され、日本に於ける「黄檗画像」形成の基となった。いわば、曾鯨は、「黄檗画像」の生みの親である。又、曾鯨の作品の本質を検証する事により、曾鯨の肖像画風に西洋の影響があるという説に、反証を提示する予定である。併せて、当時の西洋画風に影響されたとされる他の画家の作品群を調査し、曾鯨の画風との差異や近似点を洗い出す。最初に、南京周辺での調査を行なう。南京には、明末、イエズス会宣教師マテオ・リッチが訪れ、彼の携えていた西洋画法によるマリア像等に触発され、曾鯨の肖像画に見られる立体表現が完成されたとする説がある。一方、曾鯨の肖像画の新しい様式は、あくまでも、伝統的な中国肖像画の新しい様式は、あくまでも、伝統的な中国肖像画の様式の上に立って、明末の豊かな文化環境に作用され、且つ曾鯨の人間観、即ち自由で開放された瞬間に、その描かれる人物の特異性が現れるという認識の基に成されたという見方もできる。曾鯨とマテオ・リッチとの邂逅は、果して実現していたのか。諸文献の記述によって検証する。マテオ・リッチの行動記録と、それに伴う中国人の西洋画観を当時の画論に探り、子細に突き合わせ、その可能性の可否を探る。呉彬の作品は、江戸時代の日本には、左程、強大な影響を与えたとされる痕跡は無いが、黄檗宗と共に齎されたと思われる陳璜「観音図」には、明かに呉彬の仏教絵画との共通点を有する事が指摘されている。呉彬絵画の有する明末清初絵画の特徴の検証。曾鯨と呉彬とは、福建莆田という同じ出身地であり、ほぼ同時期に南京で活躍したという稀有な存在である。明末の南京を中心とした文献資料には、双方の活躍ぶりを示した事項が数多く見出されるが、二人の共通の友人がいるにも拘わらず、二人が接触し、何等かの行動の跡を残したという例は示されない。当時、南京を代表する文人董其昌に関しては、彼の書画冊『秋興八景冊』の冒頭に曾鯨が、董其昌の肖像画を描き、董其昌は、呉彬の『五百羅漢図』に題賛を寄せているのだが。呉彬は画家としての人生を南京郊外の棲霞寺内の枝隠庵で過ごし、イエズス会宣教師マテオ・リッチの南京来訪に反応した痕跡は全くない。イエズス会宣教師として、南京を訪れた際の、マテオ・リッチ周辺に集った文人知識人達の反応振りを、様々な文献に探り、曾鯨を取り巻く、当時の文化状況を再現する。マテオ・リッチの携えていた宗教画がどのようなものであったかを確認する事も重要である。マニエリスムの絵画であったのかどうか。以上の二人の他、同じく福建出身の画家達、王建章・大鵬・趙珣・陳曾則等は、江戸時代の日本で高い評価を得ていた。福建省博物館、及び、各画家の出身地での関連作品及び関連資料の調査を行なう。彼等に関しては、日本側で残された作品や記録を検証し、中国側の資料との総合を行なう江戸時代、三百年間の間に、

かなり膨大な数の中国画が流入したと思われる。上記で示した画家以外に、林良、張路、呉偉、鄭顛仙・蔣嵩等、中国本土では一時異端視された画家群の作品も積極的に輸入された。これらの作品調査は、中国本土での欠落部分を補う意味でも極めて重要である。一方、日本に存在する沈銓絵画、及び来舶画人の絵画の中には、かなりの数の偽作絵画が、彼等の名を騙って混在する可能性が高い。来舶画人の作品と日本人南蘋派画家の作品調査を同時進行し、その中での共通点と差異を検証することが必要である。この結果、総体的に、沈銓絵画がどのように、江戸時代の日本絵画界に影響を及ぼしたかが、明らかになる。即ち、影響関係の実態が明白になり、中国の要素と日本的要素との峻別が極めて厳格に行なわれることになる。最後に、沈銓及び来舶画人関連の貴重な資料となり得る所の、唐絵目利の残した「粉本」の調査を行ない、逸失した作品に対する復元的補強を行なう。又、「画譜」類に見られる沈銓及び南蘋派画家の作品群の確認も行なう。中国から齎された「画譜」「画論」の影響範囲を検証する。「画譜」には、『三才図会』『芥子園画伝』『図会宗彝』『八種画譜』等、日本で翻刻された中国の「画譜」、いわゆる和刻本の他、日本人画家の手に依って編まれた、『蘭齋画譜』『宋紫石画譜』『古今画藪』『寒葉齋画譜』『春溪画譜』『和漢名筆画法』『和漢名画苑』『辺氏画譜』『画本手鑑』『名藪画譜』『林麓娛観』『金玉画譜』『画宝』等、多数のものが、その中に掲載された画図は、絵手本として頻繁に使用された。これら、「画譜」と「本画」との直接的な関係を示す例として、「近世日本絵画と画譜・絵手本展」(町田市立国際版画美術館、1990年)がある。これらの成果を踏まえ、更に、『摺印補正』『萬法全書』等の「印譜」、江戸文人や画家達の記録や画論、『漱芳閣書画銘心録』『画筌』『玉洲画趣』『山中人饒舌』等を加え、多角的、立体的に当時の日本画界と中国との関係を明らかにする。

4. 研究成果

平成26年度は、中国での実地調査を三期に亘って実施した。

一回目は、江戸時代、1731年、日本に渡来し、1733年に帰国した沈銓の故居のある浙江省新市鎮を訪れ、現地の沈銓研究会の方々と会合を持ち、近年の中国国内における沈銓に関する研究の動向について、情報交換の場を得ることができた。中国人画家沈銓が日本の絵画界に与えた影響は、多大なものであるが、現在、沈銓研究会では、その認識と具体的作品の把握が、希薄であった。日本で出版された画集や関連書籍の提示と今後の研究方針の核は確認することができた。日本では黄檗画像の祖ともなる曾鯨の描いた胡爾慥の故居も訪ね、彼の当時の社会的地位と曾鯨との関連を把握した。上海、松江では董其昌故居

を訪ね、僅かに残された所の書齋の柱一本に遭遇した。この書齋跡もマンション建築でやがて失われるとのことである。

第二回目は、福建省に於ける実地調査である。江戸時代、日本に渡来した黄檗僧隱元の住した福建省萬福寺と呉彬の作品に描かれる廊橋の実地調査、及び福建省博物館での曾鯨・趙珣作品の調査を骨格としたものである。江戸時代、長崎に交易でやってくる中国の船員の信仰の中心となる媽祖の祀られる媽祖島にも訪れ、中川忠英『清俗紀聞』の叙述記録を確認した。曾鯨と呉彬の故郷である莆田を訪れ、莆田博物館長と面会することができた。また、萬福寺では、住持の悲昇禪師と会談をもち、この機会を通して、いずれも貴重な資料を閲覧することができた。

第三回目は、南京と嘉興での実地調査である。南京では、南京藝術学院周積寅教授と会い、曾鯨・呉彬に関する情報提供及び、意見交換を行った。南京郊外の棲霞寺は、呉彬の画室が在ったと推測される場所であるが、棲霞寺の寺務所主任徐興海氏に面会し、様々な質問をしたが、残念ながら具体的な情報を得る事が出来なかった。但し、呉彬と棲霞寺との関係が強かったことは、他の調査からも明らかであり、寺の様々な表示からもその一端が示されていた。また、曾鯨の書画の背景を探るため、氏にあたる胡涓関連の資料を求めて、嘉興博物院でも調査を実施し、一定の成果を得る事ができた。

平成 27 年度では、平成 26 年度調査の内容の裏付けを行うために国内での文献調査の他、中国での調査を 2 期に亘って実施した。

第一回目の調査では、頼山陽、田能村竹田らに影響を与えた安徽派画家に関する調査を目的に中国・安徽省において、安徽派の始祖であるところの人画家・蕭雲從の足跡を辿る。まずは、『太平山水詩画』に関し、資料の収集と李白記念館での調査を実施した。次いで、太平山水画に詳しい、蕪湖師範大学・汪教授を訪問し、情報交換を行った他、教授の計らいにて蕭雲從縁の地などに同行いただき、通常外国人が調査する事が難しい閉架書庫内の資料も特別に閲覧することが出来た。山水画に描かれている山々もそれぞれ調査地として訪問し、縁の資料や文献の調査を並行して進めた、中でも中国画の材料である宣紙と宣筆について、工房にて作業過程を見る事ができた。

徳清新市鎮に移ってからは今年度も沈銓研究会に参加し、他の研究者からの研究動向を伺い知る事ができたほか、研究用の資料として、図書などを譲り受ける事ができた。また、会には沈銓の子孫に当たる沈美玉氏が参加しており、沈銓の故居の現状に関して、重要な情報を得る事ができた。

第二回目の調査では、天津博物館にて、安徽派・蕭雲從の山水図巻 3 点と沈銓の師の古湄、江戸時代に田能村竹田や頼山陽等の人気を勝ち得た施薄の作品の特別観覧を行い、併

せて、明末清初の作品展を調査した。また、山東省博物館、山東省済南市博物館にて沈銓の作品に関する調査を行い、青島市では、高鳳翰に関する調査も実施した。これらは明清絵画の作品の伝来を知る上で、極めて重量な調査となった。

平成 28 年度では、主に全体の取り纏め及び、前年度までの補完調査として、中国における実地調査を 2 期に亘って行った。

第一回調査では、安徽省を始点に、新安派の画跡を追いながら、山水画を中心とした作品調査を行いながら、当時の日本との通商の起点ともなった南京に向けて、その伝達の経路を辿った。

具体的には、山東省煙台博物館、安徽省博物館、浙江省徳清博物館を訪れ、作品調査を行った。この中、煙台と安徽では、特別観覧の機会を恵まれ、絵画・資料を熟覧する事が出来た。徳清博物館では、曾鯨「胡爾慥像」と、呉琦「墨松図」を観覧し、併せて沈美玉（沈銓の子孫）と会い、浙江東陽に沈氏の封地があったという情報を得た。この件に関しては、今後、確認を要するものの、大変興味深い資料提供であった。これにより、清朝の沈氏一族の社会的地位の様相を明らかにすることができた。

第二回目の調査では、安徽省において、孫湛「江瑞宇像」、孫一駿「崑現像」、「三代容像」、林良らの作品に関する調査を行った。また、研究全体の取り纏めとして、安徽省での文献調査、絵画作品調査を改めて実施した。調査は主に、新安派絵画の我が国に伝達経路についてであり、すなわち新安商人の発祥の地、歙県での調査となった。歙県博物館では、当地出身の肖像画家・孫湛の絵画・文献を調査し、それらが曾鯨を中止とする波臣派の肖像画とは隔しながらも、どちらかといえば孫湛の作品の中でも保守的・守旧的なものであるものの、迫真性と訴求力が多大なものがあり、当時数多くの文人たちを魅了した理由を理解する事が出来た。

これらの調査により、明末清初、安徽省南部から華やかな商業活動を展開した新安商人の活躍と共に、この地の出身の画家や文人も、南京・揚州・蘇州・杭州らの文化花開く地において、優れた文化創造を生むに至り、やがてそれらが当時の鎖国制度の江戸時代に日本に齎され、美術・芸術の分野だけに留まらず、当時の日本の文化一般に広く影響を与えていった事が確認できた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

近藤秀實、新安の幻影 蕭雲從と孫逸を中心に 頼山陽と田能村竹田、多摩美術大学研究紀要、査読有、30 号、p205-p246、2015

近藤秀實，明末清初の肖像画～孫湛を巡って，多摩美術大学研究紀要，査読有，31号，p131-p149. 2016

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

近藤 秀實 (KONDO, Hidemi)

多摩美術大学・美術学部・教授

研究者番号：90225623